

新装版

塔の断章

Suzumi Shui

乾くるみ





講談社文庫

常州大学図書館
新装版
藏 塔の断章 章

乾 くるみ

講談社

|著者| 乾 くるみ 1963年、静岡県生まれ。静岡大学理学部数学科卒業。'98年、『Jの神話』で第4回メフィスト賞を受賞し作家デビュー。ほかの作品に、『^{はこ}匣の中』『マリオネット症候群』『林真紅郎と五つの謎』『イニシエーション・ラブ』『リピート』『クラリネット症候群』『カラット探偵事務所の事件簿』『六つの手掛り』『セカンド・ラブ』『嫉妬事件』などがある。

しんそうばん とう だんしょう
新装版 塔の断章

いぬい
乾 くるみ

© Kurumi Inui 2012



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2012年11月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277416-1

目次

塔の序章	5
塔の断章	10
塔の終章	260



講談社文庫

新装版
塔の断章

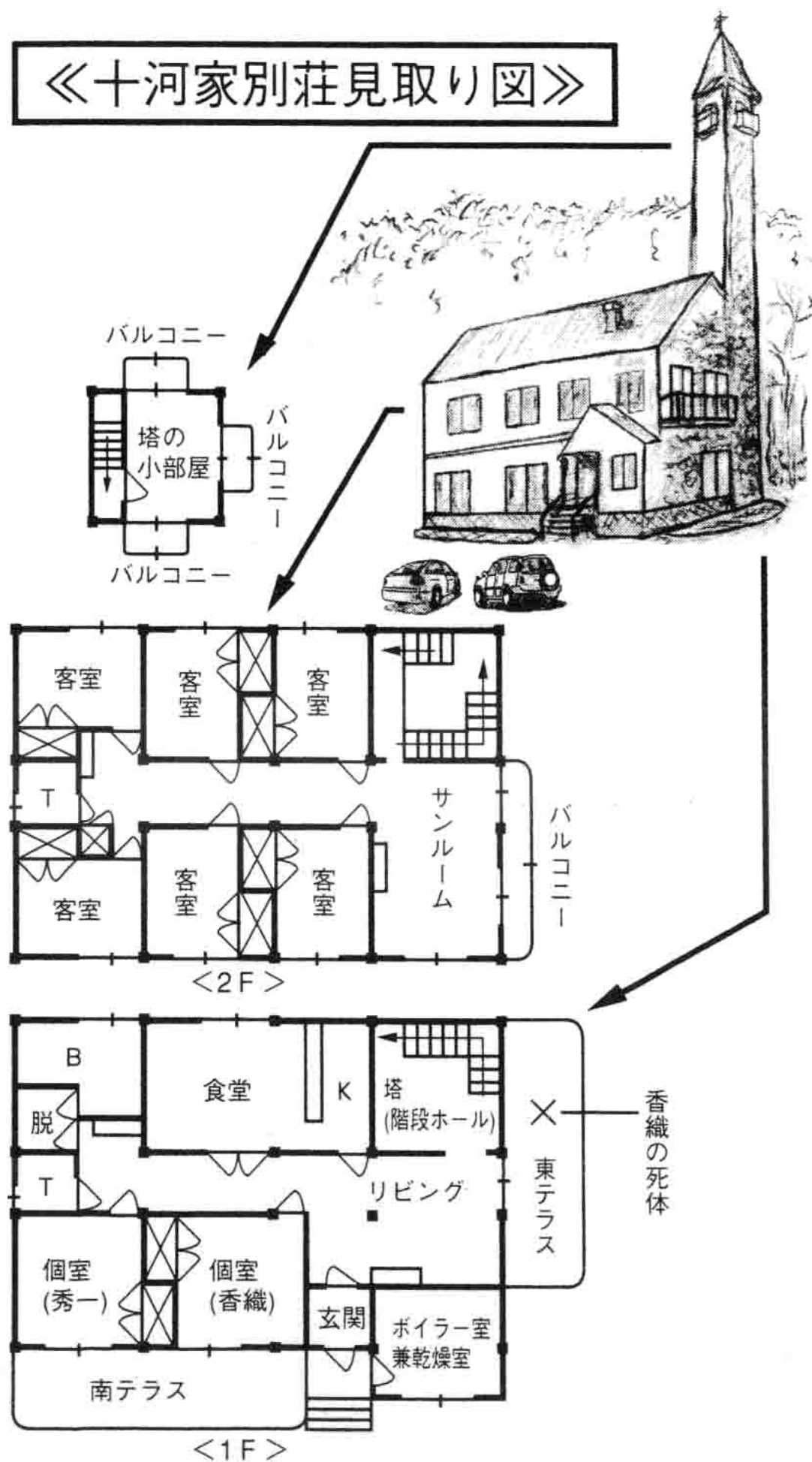
乾 くるみ

講談社

目次

塔の序章	5
塔の断章	10
塔の終章	260

《十河家別荘見取り図》



塔の序章

部屋のドアが開いて、女が入って来る。女は電灯のスイッチに手を伸ばしかけたが、ためらい、結局そのままにした。

続いて男が入って来る。男は後ろ手にドアを閉めると、ノブの中央についたツマミを捻ひねつて、ドアを施錠せじようした。

室内は異様に蒸し暑かった。男は正面の壁に歩み寄ると、カーテンを開き、窓を開けた。窓は足元まである大きなもので、蝶番ちようぱんで左右とも外に向かつて開くようになっていた。その外はバルコニーになっており、男は外に出た。

室温よりは涼しい風が、男の頬を撫なでて行つた。遠いうねりのような音が、かすかに聞こえて来る。窓の外には、白樺林しらかばやしの梢こずえが並んでいる。わずかな風が吹き、梢が葉ずれの音を囁ささやき交わす。

白樺林の向こうには、湖が見えた。湖の対岸には低い山がシルエツトとなっていて、その

稜線をかすめるように、月が出ていた。赤い色をしている。その月と山はさかさまになつて、湖面にも映り込んでいた。

男はバルコニーの手すりに背をあずけ、室内の女を振り返った。

「――で？」

男の視線をはね返すように、女はキツと睨み返すと、囁き声で、しかし相手を咎める、強い口調で言った。

「どういうつもり？」

「何が？」

「わたしのこと――見捨てるつもり？」

ひと呼吸ほどの間があつた。

「そうだ」

男は表情すら変えずに、冷たくそう答えた。女は低い囁き声でなおも尋ねる。

「どうして」

「あんたが勝手にやったことだ。俺には関係ない」

「そんなの！　だってわたしは、全てあなたのために――」

「シッ。……声が大きい」

男は女の両肩を掴んだ。二人の間で時が止まる。バルコニーの上を生ぬるい風が撫でて行

き、木々の梢が音を立ててうごめく。

「俺のため……だと？」

女は男の腕を振りほどくと、厳しい視線で、男の目をジッと見返した。

「だったらわたしも言うけど。あのことを」

「あのこと？ 何のことだ」

「あの——赤ちゃんのことに関わってるでしょ」

女は顔をわずかにしかめ、手を腹部にあてて、それでも勝ち誇ったように言った。

「赤ちゃん？」

男は眉をひそめる。

「そう。父親はあなただって——」

「ばかな！」

男は相手の言を拒絶するようにきっぱりとそう言ったが、女の目の中にある確信の色は変わらなかった。それを認めて、続く男の言葉は、いくぶん柔らかい口調に変わっていた。

「いや、しかしそんなはずはない。ちゃんとそうならないように——」

「でも、できちゃった。よくあることですよ」

男は嘆息した。

「本当なんだな。知らなかった……。ところでそれは、いつ？」

「あの夜」

女の答えに、男はハッと息を飲んだ。思い当たることがあつたのだろう。

「まさか、それであんたは——」

男の問い掛けに、女はこつくりと頷いた。その目には涙が光っている。

「……そういうことか」

男は得心したというように、そう囁くと、女の肩を優しく抱いた。それにこたえて、女は両腕を男の首にまわし、顔を相手の胸にうずめる。

「ねえ、どうにかならないの。あなたの力で。じゃないと、もうお終いじゃない。わたしも——あなたも」

そして潤んだ目で男の顔を見上げようとしたところで、女はハッと息を飲んだ。耳元で男の声が囁いた。

「確かに。あんたはもうお終いだ」

気がつけば女の身体は、男によって抱き上げられていた。男はそのまま、女の身体を手すりの向こうへと押しやろうとしている。そして女が抗おうという意志を見せた時には、もうその身体はバルコニーの外に出ていた。

男が頭を下げる。その首にまわしていた女の両腕は、つるんと抜ける。

そして女は、宙に放り出されていた。

女の目に、地面ははるか遠くに見えた。そこまで遮るものは何もない。女の喉はカラカラに渴いていた。ゴウツと風を切る音が女の耳に響く。そして女は墜落して行つた。男は女を振りほどいた後、一瞬、女の方へと手を伸ばしかけたが、もう間に合うはずもない。

血の色に染まった満月だけが、それを見ていた。

塔の断章

その朝――

部屋で着替えを済ませると、わたしは階段ホールまで出た。サンルームには誰もいない。ついで手すりから身を乗り出し、階下の様子を窺^{うかが}つてみる。

リビングには二人の先客がいた。

秀^{しゅういち}一さんは部屋着のまま、窓に背を向けてソファに座り、煙草を吹かしている。向かいに座った大磯^{おおいそ}さんは、既にポロシャツに短パンといった軽快な服装に着替えていて、秀一さんに向かって何やら話し掛けている。薄地のカーテン越しに差す朝の光が、そうした二人の姿を明るく照らしていた。

「おはようございます」

声を掛け、階段を下りてゆくと、二人はぱっとこちらの方を見た。

「あ、辰巳^{たつみ}さん、おはよう。どうです、よく眠れましたか」

如才なく応対してくれたのは大磯さんの方で、秀一さんの方は眠たげな目をこちらへと向けると、口の中で何やらもごもごと呟くだけであった。

「おかげさまで」

二人とは別なソファに腰を下ろしながら、そう答えた時、わたしはキッチンの方で物音がしているのに気づいた。誰だろうと思う間もなく、大磯さんがすかさず説明する。

「夏っちゃんが今、コーヒーを淹れてくれてんの」

そこでひとり勝手に頷くと、また秀一さんの方を向いて、

「それにしても、おい、十河、他の連中はまだ起きてこないのかよ」

「文化人はみんな朝が苦手なんだよ。おまえとは違って」

煙を吐き出しながら、秀一さんが言う。大磯さんは、自分に向けられた皮肉も意に介さない様子で、

「あー、それにしても腹が減った」

ただっ子のように、最後にはソファに大の字になったかと思えば、次の瞬間には、おつ、と呟きながら身を起す。相変わらずせわしない様子だ。わたしは大磯さんの視線の先を追う。すると、

「辰巳先生、おはようございます。先生も、コーヒーでよかったですか？」

西野夏子が姿を見せていた。オレンジのポロシャツに白のキュロットという、大磯さんと

同様に活動的な姿で、ノーメイクのその顔は健康的な色に染まっている。若い女性にしては珍しく、朝に強いタイプらしい。トレイに載せたポットからは、美味しそうな湯気が立っている。

「おはよう夏子さん。やっぱり朝はコーヒーですよ」

言いながら、わたしも盆を置く場所を空けたり、カップを用意するのを手伝ったりした。秀一さんはじっと動かず、煙草をくゆらせている。大磯さんは手持ち無沙汰な様子で、ソファに座ったまま背伸びをすると、

「夏っちゃん、ご飯は？」

「まだです。トーストならすぐにできますけど」

「あ、じゃあ俺、自分でやるわ。他にトースト、欲しい人はいる？ 十河はいらないな。辰巳さんは？ いらない？ 俺だけね。……そのコーヒー、ひとつはとつといてよ、俺んのだからね」

パツと立ち上がり、カップのひとつを指差すと、のしのしとキッチンの方に消えて行つた。

「おはようございます、みなさん」

入れ替わるようにして、今度は松浦まつうらさんが階段を下りてくる。カッターシャツに紺のスラックスと、相変わらず、避暑地には似つかわしくない格好をしている。さすがにネクタイま

では締めていなかったものの、シャツのボタンは喉元まできっちりと填められていて、何とも堅苦しい。髭もちゃんと剃られている。左手の包帯は昨日のままだ。

「みなさん、おはようございます」

リビングまで来ると、松浦さんは腰を下ろさず、そのまま窓の方へと向かう。

「なんでカーテン、閉めたままにしてるんです？ 外はいい天気ですよ」

「あ、十河さんが眩しいって——」

夏子の言葉に振り返りながらも、彼の手は止まらなかった。シャツという音を立てて、カーテンは一気に開かれる。

リビングの中がぱっと明るくなった。

「や、すいません室長。でももう朝ですから——」

言いながら、窓の外へと目をやって——。

わたしはその時、松浦さんの背中を見ていた。ギクリとひとつ痙攣し、そして石化した背中。
中。

二秒ほどの間があり、そして松浦さんはギクシャクとした動きで後ずさると、こちらの方を向いた。表情が凍りついている。まるで信じられないものを目にしたとでもいったふう

に。
「室長。か、香織さんが……」